

小学校の物語文における発話行為を詳述する語句について

白 勢 彩 子*

日本語学・日本文学分野

(2015年8月28日受理)

要 旨

本稿では、小学校の国語の教科書の1年から6年に掲載されている「物語文」を対象に、発話行為の動詞を修飾する副詞等の語句の用例を調査し、学年間を比較して、登場人物の発話の意図や感情を把握する手がかりが、どのように示されているのかについて、記述的に分析を行った。「発話行為にかかわる動詞」とは、「言う」「話す」「叫ぶ」等の、「声に出して発話する」行為を指す動詞群である。これらの動詞と、「やさしく言いました」の「やさしく」のように、動詞を修飾して、発話行為を限定し、詳述している要素である修飾語句を、物語文から抽出した。修飾語句が共起する割合は、発話行為にかかわる動詞のおよそ3割であった。修飾語句を「活動性」や「比喩」などの指標に基づいて分類し、分析を行った。その結果、「活動性」、「心情」、「オノマトペ」、「比喩」の出現頻度が高いこと、「活動性」は学年が上がるにつれ出現頻度が減少し、「比喩」は学年が上がるにつれ増加することが示された。これらの分析を通じ、学年が上位になるに従い、量に加え、質的にも変化していることが確認された。

キーワード：小学校国語、物語文、発話行為、動詞、修飾、心情

1. はじめに

声に出して読む行為である「音読」は、小学校の国語の『学習指導要領』において、「読むことの能力を育てるため」の指導事項として取り上げられている。低学年では「語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて」、中学年では「内容の中心や場面の様子がよく分かるように」、高学年では「自分の思いや考えが伝わるように」音読することが示されている。『学習指導要領解説 国語編』(p.9)によると、音読は「学習過程の明確化」に基づくものである。

一方、音声言語の研究領域においては、音声には言語情報、パラ言語情報、非言語情報の3種の情報が含まれていると指摘されてきている[1]。中でも、パラ言語情報とは、話者の態度や意図の情報伝達をなすものであり、近年、「感情音声」として研究が盛んであ

る[2]。

これまで、筆者は、発話行為に関する動詞を中心に分析し、教科書の物語文において、「喜怒哀楽」の基本感情を表現する語句が、どの程度、動詞と共起しているのかについて調査した[3]。教科書三社の6年生の教科書の分析を通じ、これら基本感情の表出語句の生起頻度は高くないことを指摘した。しかしながら、「喜怒哀楽」以外に、どのような表現がどの程度、出現していたのか等について明確でない。本稿では、この結果を受け、発話行為の動詞を修飾する副詞等の語句の用例を調査し、学年間を比較して、音読の際、登場人物の発話の意図や感情を把握して表出する手がかりが、どのように示されているのかについて、記述的に分析を行いたい。

* 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 日本語学・日本文学分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

2. 調査概要

2. 1 資料

小学校の国語の教科書のうち、教育出版、三省堂、光村図書（以下、それぞれ「教」「三」「光」と略）の三社から出版された、1年から6年のものを資料とした。いずれも平成23年度版である。掲載されている教材のうち、いわゆる「物語文」を対象とした。教科書間で重複している教材文(例えば「おおきなかぶ」等)もあり、これらについては、いずれか一社の教科書のものを対象とすることを基本方針とした。

教材文から、発話行為にかかわる動詞と、それを修飾する副詞や修飾句等を抽出した。ここでいう「発話行為にかかわる動詞」とは、「言う」「話す」「叫ぶ」等の、「声に出して発話する」行為を指す動詞群である。これらの動詞を修飾する語句は、発話行為を限定し、詳述している要素と考えられる。これらを本稿では、単に「修飾語句」とするが、「発話行為を限定・詳述する要素」であり、発話者（本稿では物語の登場人物）の意図や感情等を表現するものと捉える。以下に具体例を示す。

やさしく言いました

(「まほう使いのチョコレート・ケーキ」三・6年, p.128)

勢いよくさげびました

(「まほう使いのチョコレート・ケーキ」三・6年, p.130)

大きな声で言い張った

(「カレーライス」光・6年, p.22)

「やさしく」、「勢いよく」、「大きな声」は、後続する動詞の発話行為をより具体的に示すものとなっている。これらの語句は、登場人物の台詞を音読する際の手がかり、つまり、本文の「場面の様子」や本文に対する「自分の考え」を明瞭化する手がかりとなっているものと考えられる。

2. 2 分類指標

修飾語句を一定の基準で捉えて分類するため、先行研究 [4][5] を参考に、タグを設定し、語句に付与した。タグは、「好悪」、「速さ感」、「活動性」、「スタイル」、「声質」、「比喩」、「心情」、「オノマトペ」および、声の「明暗」「硬軟」とした。「好悪」から「スタイル」までの

4点は、講演音声の印象評価のための語彙セット [5] に基づく。これらはそれぞれ4項目からなるセットであり、例えば「好悪」には「好きな—嫌いな」、「心地よい—不快な」、「活動性」には「声の大きい—声の小さい」、「積極的な—消極的な」、「スタイル」には「まじめな—ふまじめな」、「丁寧な—ぞんざいな」等の評価項目が含まれる。講演音声の評価のための語彙であり、本稿での分析には必ずしも適切とはいえないが、音声言語を評価する指標として信頼性があると考え、用いることとした。

「声質」は、「話し手が程度の差こそあれ、話している間中ずっと存在する特性で、発話された音声にはほぼ永久的に存在する質」と定義され、これを評価する語のセット [4] であり、「高い声—低い声」、「かすれた声—澄んだ声」など8項目が含まれている。

「比喩」、「心情」、「オノマトペ」、声の「明暗」、「硬軟」は、先行研究に該当がなかったため、本稿で新たに設定した項目である。「比喩」とは、「見てはならないものを見たように言う」(「変身したミンミンゼミ」光・6年, p.234) のような比喩表現を指す。「心情」とは、喜怒哀楽や恐れ、「不思議そうに言う」(同上, p.233) のように、話者の気持ちを述べたものを指す。声の「明暗」、「硬軟」は、他に比して個別的な指標であり、「スタイル」や「声質」に含められそうだが、今回の分析では別項として扱った。

3. 結果

3. 1 出現数

動詞の出現総数および総数のうち修飾語句が共起した数を表1に示す。修飾語句の共起は、1年で頻度が低く、6年で高いという傾向性があるものの、全般には3割程度の出現数であったといえる。詳細は別稿 [6] に譲る。

表1：出現数

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
動詞総数	91	187	80	82	110	138	688
修飾語句 共起数	24	38	23	24	28	54	191

表2に、修飾語句の、指標ごとの出現数を示す。学年を通じ、「活動性」項目の出現頻度が高かった(32.1%)。次いで、「心情」、「オノマトペ」の出現頻度が高い(それぞれ20.1%, 20.7%)。

表2：指標ごとの出現数（実数）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
指標							
好悪	0	0	0	0	0	2	2
速さ感	0	2	0	1	0	1	4
活動性	11	12	7	7	9	13	59
スタイル	0	0	2	0	0	2	4
声質	1	0	2	5	2	3	13
比喩	1	1	1	1	5	7	16
心情	3	14	4	3	2	11	37
オノマトペ	5	6	7	5	6	9	38
明暗	0	0	0	0	1	1	2
硬軟	2	2	0	2	0	3	9
未分類	1	1	0	0	3	2	7

学年による変化をより詳しく把握するため、図1を作成した。作成にあたり、出現頻度の低い「好悪」、「速さ感」、「スタイル」、「明暗」の項目は除外した。横軸に学年、縦軸に出現数を相対頻度（％）で示した。出現頻度の高い「活動性」は、学年が上がるにつれ減少していく傾向にあることが読み取れる。「心情」は、2年にピークがあり、他の学年では10%台の出現頻度である。「オノマトペ」については、学年ごとのばらつきがある。「比喩」については、1～4年での出現頻度は低いが、5、6年、特に5年で出現頻度が高くなっている。

3. 2 指標別の分析

量的な変動が何を示すのかを更に検討するため、指標ごとに具体的な用例を挙げる。指標としては、出現頻度が高い「活動性」、「心情」、「オノマトペ」、「比喩」

を取り上げる。

まず、「活動性」の用例を挙げる。後述するが、「大きい」「小さい」に関する同様の語句が多く出現しているため、煩雑になることを避け、主な用例を挙げることとする。

「活動性」

【1年】

大きなこえで「おいしい」と、よびました（「くじらぐも」光・1年下、p.6）

小ごえになってきた（「夕日のしずく」三・1年下、p.81）

【2年】

大声でどなりちりました（「スーホの白い馬」光・2年下、p.102）

小さな声で言いました（「ないた赤おに」教・2年下、p.65）

【3年】

特別大きな声で言ったのは（「ピータイルねこ」三・3年、p.28）

けんめいにさけぶ声がしました（「うさぎのさいばん」三・3年、p.78）

【4年】

元気そうな男の子の声が近づいてきました（「白いぼうし」光・4年上、p.13）

小さな小さな声でした（「白いぼうし」光・4年上、p.16）

【5年】

一段と大きいかん声が、甲板の上に上がった（「競争」三・5年、p.83）

小声で答えた（「カニモトくん」三・5年、p.19）

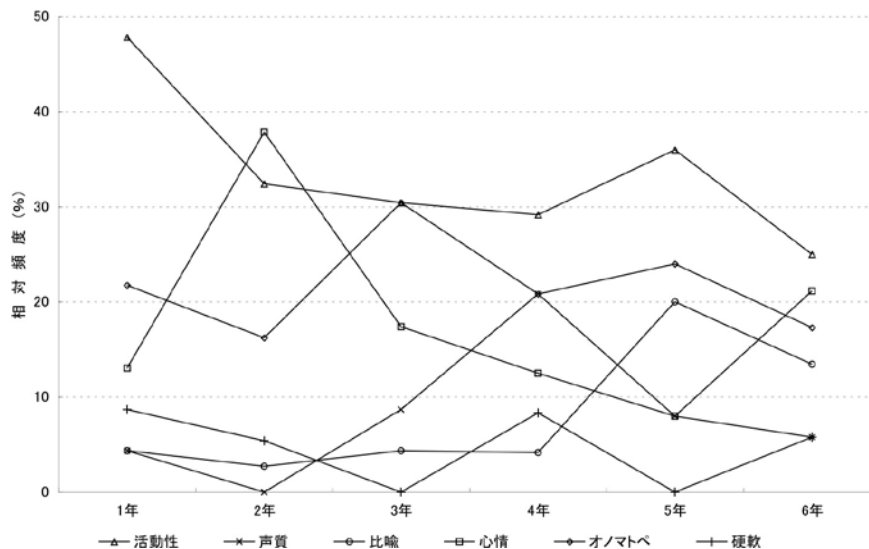


図1：各指標の学年変化

【6 年】

大声で言った（「ブラッキーの話」教・6 年上、p.136）
熱心に言いました（「雪わたり」三・6 年三省堂、p.208）

講演音声に対する評価項目としては、「声の大きい—声の小さい」、「力強い—弱々しい」、「元気のある—元気のない」、「積極的な—消極的な」がある [5]。教科書の用例では、前述の項目のうち、「声の大きい—声の小さい」が主に出現していることが確認された。この傾向は、1 年から 6 年を通じ、共通していた。

次いで、「心情」の用例を挙げる。「心情」については、詳細に検討するため、1、2、6 年の資料に現れた用例全てを挙げることにする。

「心情」

【1 年】

ねむそうにひびいています（「りすのわすれもの」教・1 年下、p.26）
たのしい音がしました（「おじさんのかさ」教・1 年下、p.136）
しんばいそうにききました（「だってだつてのおばあさん」光・1 年下、p.114）

【2 年】

ごきげんなこえで（「たろうのともだち」三・2 年、p.25）
さむそうに鳴いています（「わにのおじいさんのたからもの」教・2 年下、p.30）
かなしそうに言った（「アレクサンダとぜんまいねずみ」教・2 年下、p.105）
不思議な話をした（「アレクサンダとぜんまいねずみ」教・2 年下、p.106）
ふるえ声できいた（「アレクサンダとぜんまいねずみ」教・2 年下、p.108）
かなしい話をした（「アレクサンダとぜんまいねずみ」教・2 年下、p.109）
ためいきまじりに言った（「アレクサンダとぜんまいねずみ」教・2 年下、p.110）
こわごわ言った（「アレクサンダとぜんまいねずみ」教・2 年下、p.112）
なきながら答えました（「ちょうちょだけに、なぜなくの」教・2 年下、p.135）
びっくりしてたずねました（「ちょうちょだけに、なぜなくの」教・2 年下、p.136）
すすりなきながら言いました（「ちょうちょ

だけに、なぜなくの」教・2 年下、p.136）
むちゅうで言いかえました（「スーホの白い馬」光・2 年下、p.99）
知らんふりして言いました（「スーホの白い馬」光・2 年下、p.99）
はずかしそうに門番に言いました（「十二支のはじまり」光・2 年下、p.130）

【6 年】

うれしそうにまた語り始めた（「ブラッキーの話」教・6 年上、p.127）
少しくやしそうに言った（「ブラッキーの話」教・6 年上、p.132）
少しさびしそうに言った（「ブラッキーの話」教・6 年上、p.137）
からかうようにききました（「きつねの窓」教・6 年下、p.44）
楽しそうに言うのです（「きつねの窓」教・6 年下、p.46）
気ののらない声を出しました（「きつねの窓」教・6 年下、p.47）
うれしそうに言いました（「まほう使いのチョコレート・ケーキ」三・6 年、p.130）
おもしろそうに言いました（「雪わたり」三・6 年、p.208）
半泣き声に、ほくはどなる（「変身したミンミンゼミ」光・6 年、p.231）
不思議そうに言う（「変身したミンミンゼミ」光・6 年、p.233）
うるさそうにほくは言った（「変身したミンミンゼミ」光・6 年、p.234）

「心情」について、学年間を比較すると、1 年では「ねむそう」「しんばいそう」などの表現であるが、6 年では多様な表現が出現している。2 年では、「アレクサンダとぜんまいねずみ」の教材文で頻出していることが示されている。前節で、2 年で「心情」の出現頻度が高くなることを指摘したが、ある特定の教材文に多く出現していることが要因であることが推測される。

次いで、「オノマトペ」の用例を挙げる。同一教材内で重複する例は省略した。

「オノマトペ」

【1 年】

ポンポロンと音がしました（「おじさんのかさ」教・1 年下、p.134）

ピッチャンチャンと音がしました（「おじさんのかさ」教・1年下，p.135）

きっぱりといました（「ろくべえまってるよ」三・1年下，p.113）

わいわいがやがやいました（「ろくべえまってるよ」三・1年下，p.113）

【2年】

あっさり答えた（「フレデリック」三・2年，p.192）

ヒューヒューと風がうなっていました（「黄色いバケツ」光・2年上，p.82）

きっぱり言うと（「黄色いバケツ」光・2年上，p.85）

【3年】

がっかりしながら言います（「のらねこ」教・3年下，p.54）

ぶすつとして言います（「のらねこ」教・3年下，p.60）

にっこり言われると（「ピータイルねこ」三・3年，p.18）

ぼつんと言ったのが（「ちいちゃんのかげおくり」光・3年下，p.8）

べちゃくちゃ言ってる子どもたちを（「きつつきの商売」光・3年上，p.16）

きらきらわらい声を上げて（「ちいちゃんのかげおくり」光・3年下，p.18）

ごうごうとどよめく（「海をかつとばせ」光・3年上，p.72）

【4年】

にこにこしながらそう言って（「いわたくんちのおばあちゃん」三・4年，p.68）

キンキンひびいていました（「ごんぎつね」三・4年，p.120）

ぶつぶつ言っています（「ごんぎつね」三・4年，p.130）

にこにこして答えました（「白いぼうし」光・4年上，p.8）

せかせかと言いました（「白いぼうし」光・4年上，p.13）

【5年】

ぐちぐち文句を言い続け（「のどがかわいた」光・5年，p.17）

もごもご言いながら（「わらぐつの中の神様」光・5年，p.196）

わいわい言い出したので（「わらぐつの中の神様」光・5年，p.197）

にっこりして答えました（「わらぐつの中の神様」光・5年，p.202）

ゴート鳴る（「雪女」光・5年，p.253）

わっとさげんだ（「雪女」光・5年，p.254）

【6年】

ぼつりと言いました（「きつねの窓」教・6年下，p.47）

そつと言いました（「雪わたり」三・6年，p.214）

ひそひそ話し合っているのです（「雪わたり」三・6年，p.220）

あっさり「ごめんなさい」が言えたのに（「カレーライス」光・6年，p.17）

ふっと声をもらした（「海の命」光・6年，p.194）

ワーッと声を出して泣いた（「変身したミンミンゼミ」光・6年，p.231）

1年では、擬声語が中心であるが、学年が上がると擬態語や種類も増加し、量的にも質的にも変化が見られるといえる。

次いで、「比喩」の用例を挙げる。

「比喩」

【1年】

つぶやくようにいった（「夕日のしずく」三・1年下，p.88）

【2年】

さけぶように言いました（「黄色いバケツ」光・2年上，p.74）

【3年】

歌うように言った（「ピータイルねこ」三・3年，p.22）

【4年】

（該当なし）

【5年】

熱にうかされたみたいに、ぼくは声を出そうとする（「のどがかわいた」光・5年，p.18）

子どものように声を上げて喜びました（「大造じいさんとガン」光・5年，p.105）

あえぐように言いましたが（「幽霊を探す」光・5年，p.231）

するどく、おこっているようには聞こえないで、やさしく、苦情を言っているようにひびきました（「幽霊を探す」光・5年，p.233）

【6年】

子どものような声をあげました（「きつねの窓」教・6年下，p.49）

まるで自分と関係のない子のように言った
 (「ブラッキーの話」教・6年上, p.128)
 しっかりつけるように言いました(「まほう使
 いのチョコレート・ケーキ」三・6年, p.120)
 ベチャベチャしゃべりながら流れる、すんだ
 水のような声がまほう使いの耳に入ってきました
 (「まほう使いのチョコレート・ケーキ」
 三・6年, p.127)
 独り言のように語ってくれた(「海の命」光・
 6年, p.193)
 見てはならないものを見たように言う(「変
 身したミンミンゼミ」光・6年, p.234)

前述のように、「比喩」の用例は5, 6年を中心に出現している。1～3年にも一例ずつ出現しているが、いずれも、「つぶやくように」、「さけぶように」、「歌うように」といった、動詞を用いて行動を具体的に指示する比喩となっている。一方、5, 6年の用例では、「熱にうかされたみたいに」、「すんだ水のような」のような、具体的に、直接的にはわかりにくいような表現が用いられている。「オノマトペ」と同様、量的な変化だけでなく、質的にも変化していると考えられる。

4. まとめ

本稿では、発話行為の動詞を修飾する副詞等の語句の用例を調査し、学年間を比較して、音読する際に、登場人物の発話の意図や感情を把握して表出する手がかりが、どのように示されているのかについて、記述的に分析を行おうとした。

修飾語句が共起する動詞の割合は、およそ3割であった。このことは、発話行為が文章から直接的にわかる程度は3割ぐらいであり、他の場合については文脈等から読み取る必要があることを示唆していると考えられる。

用例に、「活動性」、「比喩」等のタグを付与し、分類したところ、「活動性」、「心情」、「オノマトペ」、「比喩」の出現頻度が高いこと、「活動性」は学年が上がるにつれ出現頻度が減少し、「比喩」は学年が上がるにつれ増加することが示された。

これらの、出現頻度の高い項目について、用例を挙げ、詳細を見たところ、「活動性」は主に、声の大きさを指示する語句であった。低学年にとって、声の大きさは、比較的理解しやすい発話行為の指示内容であり、教師にとっても、まず指導したい点と考えられ、そのことが明瞭に教材に反映されているといえる。

「心情」、「オノマトペ」、「比喩」については、学年間で量的だけでなく、質的にも変化していることが確認された。

今回、タグを付与したが、オノマトペに含めるべきか心情か、あるいは比喩か等、明確に分けられない用例も見受けられた。タグを再整理する必要があると考えているとともに、こうした線引きの難しい例を更に検討することによって、修飾語句をより明確に捉えられるようになるのではないかと考えている。

参考文献

- [1] Fujisaki, Hiroya (1997) "Prosody, Models, and Spontaneous Speech," In Y.Sagisaka, et al., (eds.), Computing Prosody : Computational Models for Processing Spontaneous Speech, New York : Springer, pp.27-42.
- [2] Erickson, Donna (2005) "Expressive Speech : Production, Perception and Application to Speech Synthesis," Acoustical Science and Technology, 26-4, pp.317-325.
- [3] 白勢彩子 (2013) 「小学校教科書と「パラ言語情報」」学芸国語国文学, 45, pp.55-60.
- [4] 木戸博・粕谷英樹 (1999) 「通常発話の声質に関連した日常表現語の抽出」日本音響学会誌, 55-6, pp.337-344.
- [5] 山住賢司・籠宮隆之・榎洋一・前川喜久雄 (2005) 「講演音声の印象評価尺度」日本音響学会誌, 61-6, pp.303-311.
- [6] 白勢彩子「小学校の国語教科書に見られる音声表出の指示語句について」(執筆中)